

自閉スペクトラム症の対人不安に関する心理臨床学的研究

木村大樹

【論文要約】

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder ; 以下 ASD とする) は, 対人性の障害と, 行動, 興味, 活動の限局を特徴とする神経発達症である。周辺群も含めると人口の 5% ほどがこの特性を持つと考えられ, 臨床現場では ASD 特性を持つ人に非常によく出会う。ASD 特性を持つ人は対人的な体験の様式が定型発達者と異なるため, 知的発達には遅れない者であっても, 日常の対人場面において様々な困難を経験している。本論文は, そのような ASD を持つ者および ASD 傾向の高い成人 (以下, ASD 者・傾向者とする) の多くが抱える対人不安について, まずは質問紙調査によって全体的特徴を調べた上で, 面接調査によって彼ら自身の語りからその体験を描出し, 心理学的に考察するものである。

本論文は短い序論に続いて序章, 第 1 章から第 6 章, 終章の全 8 章から成る。序章では ASD の対人不安に関する心理臨床学的研究を行う際の前提について述べた。特に, ASD は多様でスペクトラム性を有するため, 個別的理解が重要であることを強調した。第 1 章では ASD の対人不安に関するこれまでの研究を, 特にその要因と非定型性に着目して展望した。第 2 章では「対人恐怖症」や「社会恐怖」といった定型発達者を前提とした対人不安に関する概念と ASD 者・傾向者の対人不安の関連を考察した上で, 先行研究の課題と本研究の目的を述べた。第 3 章から第 5 章は調査研究である。第 3 章では従来の研究で対人不安との関連が一貫して報告されている自尊感情および公的自意識との関連から, ASD 傾向の高い大学生・大学院生の対人不安の非定型性を明らかにした。第 4 章では, ASD 傾向の高い大学生・大学院生に, 第 5 章では ASD 当事者に, 対人不安についてインタビューし, 彼らの語りからその体験を描出し, 特に心理学的要因に焦点を当てて質的に探索した。第 6 章では, これまでの対人不安とは変わって, 裏切られる体験を取り上げ, ASD 特性も含めてその要因を考察した。終章では, 第 3 章から第 5 章を中心に本論文で得られた知見をまとめ, ASD 特性を持つ者の対人不安について, 特に彼らの非定型的な自己意識の観点から考察し, 対人不安が彼らとの心理療法過程においてどのように現れるのかを考察した。

以下に, 各章の概要を述べる。序論では, これまでの ASD 者を対象とした質的研究, ASD 当事者の手記や心理療法事例研究から, 対人不安の例を直接引用して示した。続いて本論文で彼らの対人不安を取り上げる 4 つの理由を述べ, 本論文の構成を示した。

序章では, ASD の研究を歴史的に概観し, 心理学的研究の課題を述べた。ASD の研究は 1940 年代に Kanner, L. や Asperger, H. が学術的に記述したところから始まる。その後, 病因論の誤解と混乱の時期があり, 1970 年代ごろになって, 双生児研究等の成果によって, ASD は多病因性の発達障害であることがわかってきた。今日では, その中に多様な臨床像を含むというだけでなく, 定型発達から連続するという意味でもスペクトラムと考えられるようになり, 発症要因も非常に多様であることがわかってきている。このようなスペクトラム性や多様性の理解の進展に伴い, 2010 年代ごろより, いわゆる「グレーゾーン」や「大

人の発達障害」などの周辺群にも焦点が当てられるようになってきた。そのことを、心理臨床学系雑誌に掲載された論文数の推移で示した。この間、基礎心理学においては、ASDの「中核的」、「一次的」認知障害を特定しようとする研究が限界を迎えた。そのため、ASD者に共通のモデルや“本態”を探求するのではなく、個々のASD当事者の個別の体験を描出し、心理学的概念によって理解する研究が必要であることを提起した。

第1章では、ここ20年ほどでなされてきたASD児・者やASD傾向者の対人不安に関する研究について、特にその要因と非定型性に焦点を当てて文献を展望した。ASD児・者のうち社交不安症の診断を満たす者は20%程度であり、高い対人不安を感じている人となると半数を超える。対人不安の要因を調べた研究では、定型発達者と同じく、ソーシャル・スキルや社会的動機づけの低さがASD児・者の対人不安に関連していることを示す研究が多かった。また、ASD症状度の強さに関連していることを示す研究も多かった。しかし、以上の要因は、他者評定で測定した研究では結果が一貫せず、自己評定で測定した場合には一貫して対人不安と関連していた。すなわち、ASD者・傾向者の対人不安は客観的なソーシャル・スキルの低さやASD症状の強さではなく、本人による主観的な評価と関連していた。さらに、定型発達者とは異なるASD児・者の対人不安の非定型性として、他者からの否定的評価の懸念よりも対人交流の苦手さが際立つ、発症がやや遅い、適応機能が高いほど親の報告と一致する、好みの対人距離と関連するなどの特徴が見られた。全体として当事者の主観的体験や心理学的要因に関する研究が少なく、彼らの対人不安を彼ら自身の視点から描く研究が必要であることが示された。

第2章では、ASD者・傾向者の対人不安の位置づけについて考察し、先行研究の課題と本論文の目的を述べた。まず、対人不安と関連が深いASD特性として「対人性の障害」という視点を提示した。「対人性の障害」とは、生理学的次元における人への本能的相互的反応性の障害を指している。したがって、これまでの対人不安研究が「対人反応性」が成立した上での心理学的次元における対人不安を指していたのに対して、ASD者・傾向者の対人不安は次元が異なる可能性があるのである。次に、ASD者・傾向者らが、成長の過程でどのように対人不安が生じてくるかを、「一次障害」、「二次災害」、「高次対人状況」などの概念から典型的に描写した。さらに、ASD者・傾向者の対人不安が、「対人恐怖症」や「社交不安症」といった定型発達者を前提とした既存の対人不安概念と、どの点で重なり、どの点で異なるかを検討した。特に、日本発の概念である「対人恐怖症」の研究では、神経症的な心の構造の成立に欠かせない「自己意識」の役割が重視されてきた。しかし、ASD者は自己意識が希薄である、ないし特異的な発達を遂げているため、ASD者・傾向者の対人不安に自己意識がどのように関わっているのかを次章以降で検討すべき点として示した。また、「対人恐怖症」や「社交不安症」には当てはまらないASD独自の対人不安も報告されているため、ASD者・傾向者の対人不安には従来の「対人不安」の定義には当てはまらない体験をも含んでいる。そこで本論文では「対人不安」を広く「対人場面で生じる種々の不快な反応」を示す用語として用いることとした。第1章で示した通り、先行研究では主観的体験

や自己意識などの心理的要因よりも、客観的特徴や能力と結び付けられて理解されてきた。そこで、本論文では、ASD 者・傾向者の対人不安の主観的体験について、彼らの内側から明らかにすることとした。

第3章では、ASD 傾向の高い青年の対人不安が第2章で展望したような自己意識をめぐる既存の理論で説明できるのかを調べるため、大学生・大学院生 395 人に質問紙調査を行った。用いた尺度は「自閉スペクトラム指数 (Autism-Spectrum Quotient ; 以下 AQ とする)」、「対人恐怖心性尺度」、「公的自意識尺度」、「自尊感情尺度」である。分析の結果、ASD 傾向の特に高い大学生・大学院生 (AQ \geq 33 点, 32 人) は対人不安が全般に高く、特に<集団に溶け込めない>悩みの高さが特徴的であった。また、階層的重回帰分析の結果、<集団に溶け込めない>悩みに対して公的自意識は関連していないという ASD 傾向群の対人不安の要因の非定型性が認められた。さらに、媒介分析の結果、ASD 傾向が自尊感情を媒介して対人不安に関連し、ASD 傾向自体の直接効果も強く対人不安に関連していた。以上の結果より、ASD 傾向の高い人の少なくとも一部の対人不安は公的自意識では説明できず、むしろ ASD 特性と関連して理解すべきであることが示された。また、ASD 傾向が高いことで自尊感情が下がり、その結果として対人不安が高まる可能性も示唆された。

第4章では、ASD 傾向の高い大学生・大学院生に面接調査を行った。本論文では、ASD 者・傾向者の対人不安の主観的体験を現象学的に記述し、そこから概念を生成することを目指す。そのための具体的方法として「解釈的現象学的分析」が適していることを示した。面接調査では、ASD 傾向の高い大学生・大学院生 9 名 (男性 4 名, 女性 5 名, 平均年齢 19.9 歳) に対人不安に関するインタビューを行い、その語りを「解釈的現象学的分析」を援用して分析した。その結果、【評価懸念】、【加害不安】、【視線恐怖・被注察感】、【対人的困惑】、【会話処理困難感】、【要因の特定されない不快感】という 6 つの上位テーマが生成された。【評価懸念】から生じる対人不安についての語りでは、アイデンティティの揺れや自己意識の高まりなど、青年期らしい心理的テーマもうかがわれた。一方で、会話や人づきあいにおける相手との距離感や自然な振る舞い方などの社会的適切さがわからず、特にはっきり役割が決まっていない曖昧な場面で混乱する【対人的困惑】があり、その結果として「変に思われるのではないか」といった【評価懸念】や「自分の欠陥のせいで迷惑になっている」という【加害不安】に結びついている経験が浮かび上がってきた。また、一部の協力者の背景には「欠陥」意識があり、絶対的な自己否定とそれをカモフラージュして「普通」に擬態するあり方が認められた。さらに、加害者意識のない「見られるのが嫌」というタイプの【視線恐怖・被注察感】も語られ、得体の知れない他者の不快感がうかがえた。【対人的困惑】や【会話処理困難感】は ASD 特性に強く関連すると考えられるテーマである。【対人的困惑】はうまくプレイできない初心プレイヤー (運動選手, 演奏家) の感覚に似たものであり、「間主観性/相互主体性ゲーム音痴」という観点から考察した。【会話処理困難感】は情報処理の容量を超える感覚として体験され、背景には実行機能不全が考えられた。

第5章では、第4章と同じ面接調査を、今度は 18 歳から 46 歳の成人 ASD 当事者 8 名

(男性 6 名, 女性 2 名) を対象に行った。同様の分析の結果, 大学生を対象とした第 4 章と似たテーマが浮かび上がってきた。第 4 章で生成された上位テーマはすべて本章でも見られたが, 迫害的対人不安である【ひと恐怖】と対人場面における【聴覚過敏】が新たに加わった。【ひと恐怖】はトラウマに起因すると考えられる対人不安であるが, トラウマ的被害に遭いやすいだけでなく, 記憶がトラウマ化しやすいという ASD の記憶特性が関連していると考えられた。第 4 章でも見られた【会話処理困難感】では「理解できない・伝わらない」というコミュニケーションそのものが成り立たない感覚に関するテーマが新たに語られた。【対人的困惑】においても, 新たに「相手の気持ちがわからない」, 「根拠・目的がないと不安」というテーマが生成され, 第 4 章の ASD 傾向者よりもさらに「間主観性/相互主体性ゲーム」のプレイがままならず, 根拠, 目的, 話題などを拠り所にしていない姿が浮かび上がってきた。

第 6 章では, これまでの対人不安とは異なり, 裏切られる体験を扱っている。裏切られる体験は, これまで論じてきた対人不安と共通点を持ちつつも, いったん対象との関係ができた後に生じるという点で, 対人不安とは対照的な体験であると考えて取り上げた。裏切られる体験の心理学的要因として, (1) 「悲劇」の生成, (2) 融合の破綻, (3) 人物理解のナイーブさという 3 つを示し, それぞれ ASD 特性からも考察した。(1) 悲劇の生成は, 境界性パーソナリティ障害に特徴的な理想化からの幻滅, 時間的継起性から論理的因果性へのすりかえ, 他者由来性の体験様式のほか, ASD 者における記憶のトラウマ化などからも理解できる。(2) 融合の破綻は, 主体が対象との融合的關係を築き, それが必然的に破綻することによって生じる。ASD 特性を持つ人など, 心的境界の薄い人によく見られる。(3) 人物理解のナイーブさは, ASD 者の他者イメージの断片化や, 対人認知や状況の判断や解釈を被害的に見誤ることにより生じる。次に, 心理療法におけるクライアントがセラピストに裏切られる体験についても考察した。心理療法においては, 究極的には常にセラピストはクライアントを裏切る可能性が潜在している。そこで, クライアントがセラピストに裏切られたと体験した際にそれを乗り越える方法として, 『新約聖書』の裏切り者のユダのエピソードを考察し, セラピストはクライアントの治療者像の分裂や断片化を真に受けて罪悪感を覚えたり, 逆に開き直ったりして一面的な態度を取るのではなく, 「超越によって乗り越える」というアイデアを提示した。

終章では, これまでの章で得られた知見をまとめ, 改めて考察した。まず, 第 4 章・第 5 章で得られた ASD 者・傾向者の対人不安の生じる状況についてまとめた。次に, その要因を (1) コミュニケーションの障害から生じる困難感・困惑, (2) 二次的対人不安, (3) その他の 3 つに大別した。(2) 二次的対人不安はさらに, ASD のコミュニケーションの障害の影響から二次的に対人不安が高まる場合, 定型発達者の対人不安と同じく自己意識の影響が大きい場合, トラウマの影響が大きい場合に分けた。その上で, それぞれについて非定型的自己感, 意味志向性の先取りの失敗, 単線思考などの ASD 特性との関連から再考察した。ASD 者は, 乳幼児期に自己感が非定型的な発達を遂げ, そこに思春期以降に発達する

否定的自己意識が芽生えるという特有の自己意識の構造が認められる場合がある。そのような非定型的自己意識が、非定型的な対人不安として現れている可能性について、本論文の調査協力者の例を挙げて考察した。さらに、ASD 者・傾向者との心理療法の公刊事例における対人不安の現れ方を調べた。対人不安は主訴として生じる場合があること、時に女子大学生の ASD 者・傾向者の事例で対人不安に伴ってカモフラージュがしばしば生じること、周囲との違和感から異質な自己の意識が芽生え、それが対人不安へと至ることがあること、心理療法過程で「自己（他者）へのめざめ」として対人不安が生じる場合があることを論じた。本論文は、以上のように ASD 者・傾向者の対人不安を彼らの主観的体験から明らかにできた。今後は、ASD 者・傾向者の対人場面における体験についてより詳細に検討するために、彼らとの心理療法事例研究等が求められる。